

石井敬子氏：業績紹介

Ishii, K., Miyamoto, Y., Rule, N. O., & Toriyama, R. (2014). Physical objects as vehicles of cultural transmission: Maintaining harmony and uniqueness through colored geometric patterns. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 40, 175-188.

本研究では、シンプルかつ文字情報に寄らない文化的産物として幾何図形への色の塗り方（塗り絵）に新たに着目し、日本と北米の成人および子ども（未就学児）を対象とした一連の実験を行い、1) 当該の文化において優勢な価値を反映し、日本の成人・子どもの塗り絵はより調和的であったのに対し、北米の成人・子どもの塗り絵はより独創的であり、2)日本人は日本の特に調和のとれた塗り絵を好みやすかったのに対し、北米人は北米の特に独創的な塗り絵を好みやすく、3) 子どもの塗り絵に対して、親はその文化で優勢な価値を反映したフィードバックをしやすいこと、さらには4) アジア文化に同化しているアジア系カナダ人ほど日本人の塗り絵を好むのに対し、カナダ文化に同化している参加者ほど北米人の塗り絵を好むといった文化化 (acculturation) の効果も見出した。

Ishii, K., Miyamoto, Y., Mayama, K., & Niedenthal, P. M. (2011). When your smile fades away: Cultural differences in sensitivity to the disappearance of smiles. *Social Psychological and Personality Science*, 2, 516-522.

他者の笑顔もしくは悲しみ顔が中性表情へと変化していく動画を作成し、予備実験を通じその動画の妥当性を確認した上で、最初の表情が消えた時点に関する判断課題を日米で実施した。その結果、悲しみの消失に対しては文化差がなかったものの、笑顔の消失に対して日本人はアメリカ人よりも動画のかなり早い段階で消えたという回答をしやすいかった。さらにこの笑顔の消失に対する敏感さの文化差は、愛着の不安傾向の個人差によって媒介された。山本七平「空気の研究」でも指摘されているように、日本においては場や状況の期待に沿った行動が重視されがちだが、本研究は、そうした観察的事実に対応し、特に他者のネガティブなシグナルに対して日本人が敏感に反応しやすいことを実証したと言える。

Ishii, K., Kobayashi, Y., & Kitayama, S. (2010). Interdependence modulates the brain response to word-voice incongruity. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 5, 307-317.

本研究では、日本において顕著にみられる感情的発話の理解の際の語調の優位性について、事象関連脳電位に着目し、特に意味的逸脱の指標である N400 を用いて再検討した。特に語調に対する自発的な注意の向けやすさに関しては、関係指向性や協調性の程度が関係していることが推測される。そのため関連する外的な手がかりとして模式的な顔の提示の有無を操作し、その判断時の影響を調べた。さらに個人の独立—協調の志向性も測定し、その程度の個人差による影響も検討した。意味判断時における語調の干渉効果が大きいほど、この逸脱の指標である N400 の振幅も大きくなるが、予測と一致し、顔提示条件において顔なし条件よりもその効果は大きく (Fz, 600-750ms)、また顔提示条件においては協調的な程度が高い人ほど N400 の振幅は大きくなっていた。

Kitayama, S., Ishii, K., Imada, T., Takemura, K., & Ramaswamy, J. (2006). Voluntary settlement and the spirit of independence: Evidence from Japan's "Northern frontier". *Journal of Personality and Social Psychology, 91*, 369-384.

本研究では、相互独立的自己観の起源の一部は自発的移住にあるとし、新天地を求めて移住した人々における元々の相互独立的な傾向が新天地における過酷な自然・社会環境によって強化され、自己は独立したものという考えが人々の間に共有された結果、そういった移住の歴史が過去のものになった現在においても人々はそれに従った行動をし、そういった考えを用いて他者の行動を解釈すると予測した。この自発的移住仮説を検証するにあたり、相互協調的な自己観が優勢とされる日本にありながら、自発的移住の歴史をもつ北海道に注目した。そして幸福感、認知的不協和、原因帰属に関する傾向を調べたところ、結果は仮説を支持し、北海道におけるパターンは相互独立的であり、アメリカにおけるそれと類似していた。

Ishii, K., Reyes, J. A., & Kitayama, S. (2003). Spontaneous attention to word content versus emotional tone: Differences among three cultures. *Psychological Science, 14*, 39-46.

コミュニケーション様式の文化的差異に対応し、発話の情報処理も文化間で異なると予測した。本研究では、感情的な意味と語調の強さが言語内および言語間でほぼ同程度になるよう感情的発話のセットを開発した。そして日本、フィリピン、アメリカにおける参加者は、その発話を聞き、その語調を無視して意味の快・不快を判断するか、その意味を無視して語調の快・不快を判断するか求められた。結果は予測と一致し、日本人とフィリピン人は、アメリカ人よりも判断時に語調情報を無視できなかった。一方、アメリカ人は、日本人やフィリピン人よりも意味情報を無視できなかった。さらにフィリピンにおけるそのパターンは、発話の言語（母国語のタガログ語か英語か）にかかわらず生じ、言語よりも文化的なコミュニケーション様式による影響が強いことが伺われた。